

大峯 顯著

『永遠なるもの——歴史と自然の根底——』

法藏館 二〇〇三年五月一五日刊
A5判 三二五頁 三八〇〇円十税

保 呂 篤 彦

本書は、浄土教や西田哲学を中心にして日本の思想に、またドイツ観念論やドイツ神秘主義を中心にして西欧の思想に、それぞれ深く通じる著者が書物や雑誌に既に発表した諸論文を中心に編まれた論文集であり、所収論文の多くはここ数年の間に発表されたものである。合計一二の論文が、四本ずつ三つの部門に分けて収録されている。著者によれば、三つの部門は、著者の現在の思想的関心が集中している三つの領域に対応しており、第I部は現代文明を生きる人間にとって最も基層的な問題を取り扱ったもの、第II部はフイヒテ哲学を中心とするドイツ観念論についての研究、第III部は日本の哲学思想と仏教、とりわけ浄土教の思想に関する研究である。三部門自体にまたそれぞれ多様な内容の論文が配されており、本書がカバーする研究領域の広がりには評者の能力を遥かに超えてはいるが、何れの論文からも著者の一貫した宗教理解と読者に対するメッセージがはっきりと読み取れる。そこで以下、各論文の内容の概観を通して、読者にこれを伝えることに専念したい。

まず、第I部第一論文「ヨーロッパ精神の運命——技術の問題のために——」は、ハイデッガーの技術論に依拠しつつ、技術が人間の目的に仕える手段ではなく、人間を含む一切を深層から規定するもの、存在の真理の一形態、あらゆるものを「役立つもの」として仕立てる「発露」であって、人間はこれに携わるものの、その主体ではないと論じ、その立場から、技術を再び人間のコントロールの下に取り戻すべきであるとするヤスパース等の技術論に反対している。著者によれば、技術が存在の発露である以上、人間がそれを支配下に置くことは不可能であり、ヤスパース流の技術論は技術の本質を隠蔽してしまう。また技術の本質ゆえ、それがもたらす危険は、一切を計画的な自己貫徹のための素材にせんとする意志の無制約性にあり、したがってそれは人間の本来的な本質に至る道が閉ざされるといふ人間の本質の死の危険である。そこから逃れる道は、人間の主体的意志による行為や努力(シェーラーが期待をかける「アジアの内的生の技術」や「心の技術」をも含めて)の内には決してなく、人間が技術との主導権争いの圏域の外に出ること、つまり意志、自己中心的な欲望の地平から脱却することにしかない」と著者は主張している。

第I部第二論文「聖なるものの復権のために」は、真・善・美と聖に関する西洋思想の展開を辿り、最後にハイデッガーを取り上げている。著者は、ハイデッガー哲学における聖なるものの次元が「神性の本質空間」であり、これが閉ざされた現代においてその復権を図るには、その前提である「存在の真理」のまだ経験されていない領域に踏み入る「存在の思惟」が前提

書評と紹介

になること、この思惟が「詩作」と結びつくことをまず論じ、さらに従来の西洋では聖が俗との厳しい区別において捉えられてきたのに対して、ハイデッガーがヘルダーリンの詩に導かれて、聖なるものを上方と下方の位置の区別を超えた「混沌」として捉え、聖の概念の中心に区別を立てる伝統的な考え方に挑戦していることを指摘する。また著者は、ハイデッガーのこの聖なる混沌が単に区別のないことではなく、時と永遠、人間と神などすべての区別がそこで初めて成立するような開かれた場のことであり、これが「色即是空」「空即是色」という言葉によって示されるような大乘仏教の立場、聖が俗と区別された特殊な立場に固執する限りなお真の聖の立場たりえないとする「空」概念に接近しており、大乘仏教の「菩薩」とハイデッガーの「詩人」との間にも類似が認められると論じて、ここに新たな人間概念を開き、聖なるものを復権させる鍵があると主張している。

さて、続く第Ⅰ部第三論文「生死の視角——現代における死の問題——」は、現代人における死の忘却を問題にしている。まず著者はシェラーの議論に則って、現代人においては直覚的な死の確実性の体験が、自己目的化した仕事と金儲けの衝動によって抑圧されており、あたかも死が存在しないかのような世界が広がっており、そのため彼にとって死は生の充実者ではなく破壊者として生の外から訪れることになるが、それは決して彼自身の本来の死ではないと論じる。それゆえ、死が存在しないというこのイリュージョンに挑戦してそこから現代人を解放するのが真の思想の課題であると言う。著者によれば、その

ためには人間存在の根柢に単なる死でも単なる生でもない、両者の相互浸透、仏教のいわゆる「生死」が捉えられなければならないが、それにはハイデッガーの「死への存在」も十分ではない。彼は生の底に死を見たが、その死が現存在をいかに生かしているかを十分明らかにしなかったからであり、著者はこれを超える立場としてリルケを解釈する。著者によれば、リルケは死から生を見るのでも生から死を見るのでもなく、両者を包む開放的全体、「開かれたもの」から両者を見ており、彼において生と死が協同して、存在するものの球体の完全性を成就している。そして、この開かれた世界が実は今この現在の直下であり、人間は時間のただ中にありつつ一瞬一瞬これを超えているとする彼の理解は、仏教の「生死」の立場に極めて近いと著者は評価している。

第Ⅰ部第四論文「神話と理性」は、神話は哲学成立の根本要因であって哲学的思惟の構造そのものに属しており、これを論じずして哲学は根源的哲学たりえず、深刻な諸問題に直面する現代にあつて哲学の新しい可能性を開くためにも神話を問うことが不可欠であるという意識から執筆されている。著者によると、神話とは言葉と存在、言葉と意味の不可分の統一を成立せしめる一種の絶対的言語の圏域であつて、理性による認識の真理には解消されえないが、そのような神話の真理と理性の真理との統合を哲学自体のうちに保つ努力はプラトンに見られるものの、その後の哲学の発展の中で見失われた。ところが合理化の道が行き尽くされた時、理性に解消されない独自の真理として神話を明らかにするという課題が再び生じるのであり、これ

に正面から取り組んだのがシェリングの「神話の哲学」であったと述べ、その詳細な分析を提出する。それによると、シェリングは神話の寓意的解釈を一切退け、「神話の自己説明」という方法論を採用し、神話とは神、絶対者が自らを自覚するため必然的に通過せざるをえない過程であるという結論に導かれるのであるが、著者はこの結論自体が神話の真理を神話以外のもの（絶対者）に求める立場に再び陥っていると述べ、これを免れるためには、神話を理性との関係においてのみではなく、むしろ言葉との関係において捉える視点が必要であることを指摘して稿を閉じている。

第II部の冒頭にはドイツ観念論全体を扱った論文「絶対者の探究」が置かれ、第II部に配された他の諸論文がドイツ観念論研究において占める位置を示唆している。この論文は第一節で、ドイツ観念論哲学が、哲学は「絶対者」への問いとしてのみ可能であるという確信に貫かれていること、したがって絶対者の認識、絶対知がその本質であること、その絶対者の知に至る通路を主体性に見出し、一切の真理を根拠づける基礎地平を「自我||自我」という根本命題として捉えたのが初期のフィヒテであること、自我性の本質が主観と客観との同一であるという彼のこの発見がシェリングとヘーゲルにも共有され、「主観・客観」という共通語で表現された根本原理の解釈をめぐって三人の間で論争が行われたことを述べ、この三人の思惟の運動に次の三つの局面があることを指摘する。すなわち、(一)初期フィヒテの主観的観念論が初期・中期シェリングの客観的観念論へと展開し、最終的にヘーゲルの絶対的観念論において完

成される局面、(二)フィヒテ知識学の前期から後期への発展、(三)「後期観念論」、すなわち後期シェリングの「積極哲学」の三つがそれであり、本論文の第二節から第四節までの三節は、それぞれの局面の基本的展開を論じている。なお、著者は、後期フィヒテと後期シェリングの著作が、それぞれ独自の仕方、理性の自己制限と自己否定が理性そのものの可能性に含まれていることを明らかにしていることと述べて、自らの関心がとりわけ(二)と(三)、二つの局面に向けられていることを示唆している。以下に見る通り、実際、第II部の他の論文は何れも(二)の局面の問題を論じており、第四論文はこれに加えて(三)の局面の問題をも扱っていると言えるであろう。

第II部第二論文「フィヒテにおける神と自己」は、フィヒテの宗教理解を正面から問題にしている。「無」はドイツ観念論以後の哲学の主題であるが、ドイツ観念論においても覆面をした姿で問題になっているとして、「無」を通過して神に行くというフィヒテが辿った道を説明している。著者によれば、フィヒテは「超感性的なもの」を現実にも所有し、それを生きる経験が宗教のエレメントであると考えているが、それが時間の内なる現実の感性的世界から単に切り離されたものとは考えていない。時間的世界からの超越や永遠の生の所有は、我々が時間的世界の内なる存在を止めた後に初めて起こることではなく、あくまでも時間的世界の内でも起こることだという点にフィヒテの宗教観の特色が現れる。彼の時代批判もこれに基づいており、宗教が人間にとって生きて働く力とならなかった根本の理由を、永遠の生が現実の生とは別のところにあると誤解された

書評と紹介

点に求めているが、フイヒテはこの視点を初期から有していたと著者は論じる。また著者は、フイヒテが、地上的生に没頭する自己の放棄という自己否定によってしか永遠の生に至りえないこと、また永遠の生や神は実体としてではなく、働くものなき働きとして捉えられるべきこと、それゆえそれは静止した状態、観想の対象としては存在せず、ただ各人がそれを自ら生きるほかないと主張し、これを再び観想の対象とする立場（スピノザやシェリング）を「神秘主義」と呼んで批判していることを指摘した上で、その彼自身の立場もまたそれとは異なる一種の神秘主義（第II部第四論文では「生命の神秘主義」と呼ばれている）であって、エックハルトの立場に近づいていると主張している。

次の第II部第三論文「キエルケゴールとフイヒテにおける反省の問題」は、キエルケゴールの実存弁証法との関連においてフイヒテの主観性の哲学を見直す試みである。キエルケゴールはドイツ観念論を「主観・客観」という術語で表現し、その全体を客観性の立場と捉えて批判したが、この術語の創唱者フイヒテはこの語によって純粹自我の「自己意識」を構成する主観（意識するもの）と客観（意識されるもの）の自己同一、決して客体的に把握できない生きた能動的自我の主観的性質を表現しており、そこにはシェリングのような客体的に観想される絶対者という性格はない。しかし、著者は、それにもかかわらずフイヒテの反省作用があくまでも「理性」の機能、無限な客体化の作用であって、主観と客観、思惟と存在の間に分裂と距離を定立する立場であるキエルケゴールの「主体的反省」とは異

なっていると論じる。すなわち、著者は、いかにしても客体にならない主体、思惟の可能性に翻訳不可能な現実的存在への情熱的関心こそがキエルケゴールの「主体的反省」であって、この現実的存在とは現に思惟する者に他ならないのだが、フイヒテにあっても問われているのは思惟する者の「本質存在」(Was-sein)であって、その「現実存在」(Da-sein)ではなく、後者つまり実存こそが、フイヒテを含むドイツ観念論に欠けていたものであると述べて、キエルケゴールの実存的弁証法の意義を明らかにしている。

第II部第四論文「知的直観の哲学とエックハルトの神秘主義」は、絶対者との合一を自我の自己滅却、自由の否定と見て、神秘主義が有するこの危険との対決に超越論的観念論の立場を見ていた初期のフイヒテとシェリングが、後期にそれぞれ、いかにして絶対者への道を知の自己否定、非知と考えるに至ったか、つまりいかにして神秘主義の立場に接近していったかを、初期の段階から既に現れている両者の思想の相違点をも踏まえつつ論述し、両者が行き着いた神秘主義思想の性格の相違にまで説き及んでいる。すなわち、著者は、シェリングでは非知が絶対者の観想における自己忘却という性質を帯びるのに対して、フイヒテでは非知が絶対者を向こうにした観想ではなく、むしろ生としての絶対者を自ら生きることには他ならないという両者の相違を明確に摘出して、フイヒテのそれがとりわけエックハルトの神秘主義に接近していることを明らかにしている。また著者は、この接近にもかかわらず、「反省」という固有の問題のゆえに、生きられる絶対者としての生がどのように

「反省」の中に入ってくるかという問題が生じ、自我形式を「通轍すること」(durchdringen)による反省の自己否定が語られる点でフイヒテはエックハルトと異なること、さらにエックハルトにおいて主張された神と私の存在における同一という思想が、生の直接性よりも活動性に重心を置くフイヒテにあつては拒否されるという相違があることをも指摘している。

第III部第一論文「西田幾多郎の宗教思想」は、宗教を「生命」の問題と捉える西田幾多郎の思想の展開を論じ、それに基づいて現代における生命の尊厳論や脳死に対するアニミズム的な拒否反応などに対する著者自身の批判を同時に提出するものである。著者は西田が『善の研究』において既に宗教を「生命」の問題として論じ、自己が旧い生に死んで新しく生まれ変わるることこそが生の中核を見ているとし、このような思想がすべての真の宗教の根柢に存在すると主張する。さらに著者は、西田がベルグソンの直観による生の把握の立場との近さを意識しつつも、そこに否定の契機がない点を批判して、『自覚に於ける直観と反省』においては生(直観)と知(反省)との自覚の立場での統一を図っていると論じ、西田は生命がアニミズムによつても機械論によつても理解されえず、絶対無の場所の自己限定に由来する「絶対矛盾的自己同一」という形をもつた歴史的世界における出来事としてしか真に理解できないと考へており、自己否定のない単純な生命肯定のアニミズムに基づく現代の生命論には批判的態度を取るはずだと論じている。また、このような思想を西田が禅を基に展開したわけではなく、むしろただ我々が生まれて死んでゆく歴史的世界の現実があるがま

まに見て徹底的に分析したところ、そこに宗教的と呼ばざるをえない構造が見出されたのだと述べて、西田の「宗教哲学」の基本的性格を明らかにしている。

第III部の二つめの「三木清における親鸞とパスカル」は、三木清著、大峯顯編『パスカル・親鸞』(京都哲学撰書第二巻、燈影舎、一九九九年)の「解説」として執筆された文章であり、同書所収の三木の処女作『パスカルに於ける人間の研究』と絶筆「親鸞」、西田幾多郎との二つの対談の記録、それぞれの「解題」に相当する内容にかなりの紙幅が割かれている。しかし同時に、著者は、ジャーナリストとして時代の潮流に乗つた言論活動をもした三木の処女作と絶筆の何れもが人間における永遠なる問題を論じていることに注目し、三木の終生の問題が宗教的救済という真剣な実存の問題であったことが分かること述べて、特に「親鸞」については、その内容にまで立ち入って意義と限界を指摘している。

第III部第三論文「悲哀における死と再生」は、第I部第三論文と共通のテーマをめぐって日本における思想の展開を分析している。著者によれば、『古事記』のイザナギ・イザナミの二神をめぐる黄泉の国の神話は現世にしかリアリティを感じない独特の現世主義を表しており、この現世主義はその後も根絶されずに現代日本人の精神の基層を流れ続けているものであり、日本仏教もこれとの対決の中で形成されてきたものである。上代の日本仏教は、再生はないという『古事記』の現世主義に対して死後の仏国土を示し、仏への崇拜によるそこへの再生を説いた点で新しい世界経験の地平を開くものであったが、そこに

書評と紹介

現世否定の思想はなく、仏国土は現世から死を取り除いただけの理想化された現世でしかなかったため、日本人の現世主義に変化を引き起こしえなかった。そして、現世を「穢土」として否定し、自力では行くことのできない「浄土」の真の超越性を初めて語ったのは源信の『往生要集』であるが、それはまだ「臨終往生」の立場であり、往生は臨終に至るまで宿題として残されるため、不安を根柢から癒す教えにならなかったという。著者は、これを克服したのが、完全な自己否定を通して「往生」を現在の生における信心と結びつけた親鸞であり、これこそがキリスト教やフィヒテの思想にも見出される真の宗教の立場であって、妙好人・浅原才一の例に見られるように、民衆においても実際に生きられていたと主張している。

本書最後の論文、第III部第四論文「仏教研究批判と哲学の使用」は、宗教喪失の現代において仏教研究や宗教研究がいかにあるべきかを正面から論じている。まず著者はブルトマンの非神話化論とこのブルトマンに影響を与えたハイデッガーの解釈学的な研究姿勢を分析・提示して、次に同じ精神に基づく古典思想の哲学的解釈が仏教の歴史においても現に行われてきたと述べ、その例として親鸞と曾我量深を取り上げて論じている。さらに著者は、十九世紀半ばに「宗教哲学」と区別される「宗教学」が誕生したことには、それなりの理由と意味があるものの、現在の「宗教学」に宗教の真理を否定する世俗主義に荷担するかのよう傾向があることに危機を感じると述べ、このような時代にこそ、「哲学」、「宗教哲学」が宗教の真理を現代に生かし守るといふ本来の働きをしなければならないと論じる。

「宗学（神学）」は宗教の真理を自明として前提するため、また「宗教学」はそれに無関心なため、何れも宗教の真理と情熱的に対面することを回避しがちであるがゆえに、哲学するという態度がまさに求められるというのが著者の訴えである。

以上、書評の域に達さない単なる紹介、しかも実に拙い紹介に留まったことを著者と読者にお詫びする。しかしそれでもなお、真に「永遠なるもの」（これが本書のタイトルであるが）はこの現実と切り離されてあるのではなく、まさにこの現実世界において徹底的な自己否定を通してのみ出会われ、生きられるものであるという、フィヒテや親鸞などの研究に裏づけられた著者の宗教理解と、それに基づく著者のメッセージ、宗教の真理を忘却した現代を生きる宗教研究者に対する批判的提言の概要とを読み取って頂くことはできたのではなからうか。評者もまたこのメッセージを肝に銘じたいと思う。この拙い紹介をきっかけに読者が本書の深く豊かな内容に直接触れて下さることを希望して筆を擱く。